

2015年2月10日

2015年の曼荼羅

公益財団法人 国際通貨研究所
理事長 行天 豊雄

ECB がついに大量の国債購入を決定した。FED、BOE、BOJ に続いて今や世界の主要中銀はすべて QE ゲームに参加したことになる。これだけ皆が同じことをやるというのはそれが現状では効果が期待される唯一の政策手段だということであろう。

ECB の QE 参加は長らく予想されていたことだったが、実際に決定されるとそれなりの反応がマーケットに生じている。その最たるものが、BOJ の場合と同じく、ユーロの下落である。かつては対ドルで 1.60 迄行ったユーロが 1.10 台に下落し、年末にはドルとパーになるという予想まで出てきた。ユーロ安がデフレ抑止、輸出促進に働く可能性があるのは確かだが、日本と同じでそれがどの位消費、投資、雇用を押し上げるかはまだ判らない。

ECB の QE 参加はグローバルに見ると、米国とユーロ圏の金融政策の乖離がますます鮮鋭になり、それが国際金融市場の不安定さを一層高めたと云える。ドル高は米国製造業にとってはマイナスだし、原油価格の下落と相まってインフレを抑圧してしまう。それは FED の金利引上げに水を差すことになり市場の不安を長引かせる。

米国以外の世界では、ユーロ圏と中国の減速、エネルギー、資源価格の低下、ウクライナや中東の紛争、FED のテーパリングによる資金の米国への逆流の不安等々で景気見通しには慎重にならざるをえない。昨年来、中国、インド、ロシア、ブラジル、シンガポール等の中央銀行が雪崩を打つように利下げに走っているのは、そういう不安の反映だし、輸出競争力を守ろうという為替引下げ競争の様相すらある。

とにかく、今年はいろいろな事が起りそうである。米国が一番透明性が高く、不確定性の幅も狭い。優か良かということだろう。しかし、ユーロ圏、中国、ロシア、その他世界ということになると最悪のシナリオは相当に厳しいものがありうる。指導者の力量、国民の成熟度、企業の活力、マーケットの聡明さというようなさまざま要因で、勝

負が決まって行くのだろう。

(株式会社マネーパートナーズ ホームページへの寄稿)

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2015 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話 : 03-3245-6934 (代) ファックス : 03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>